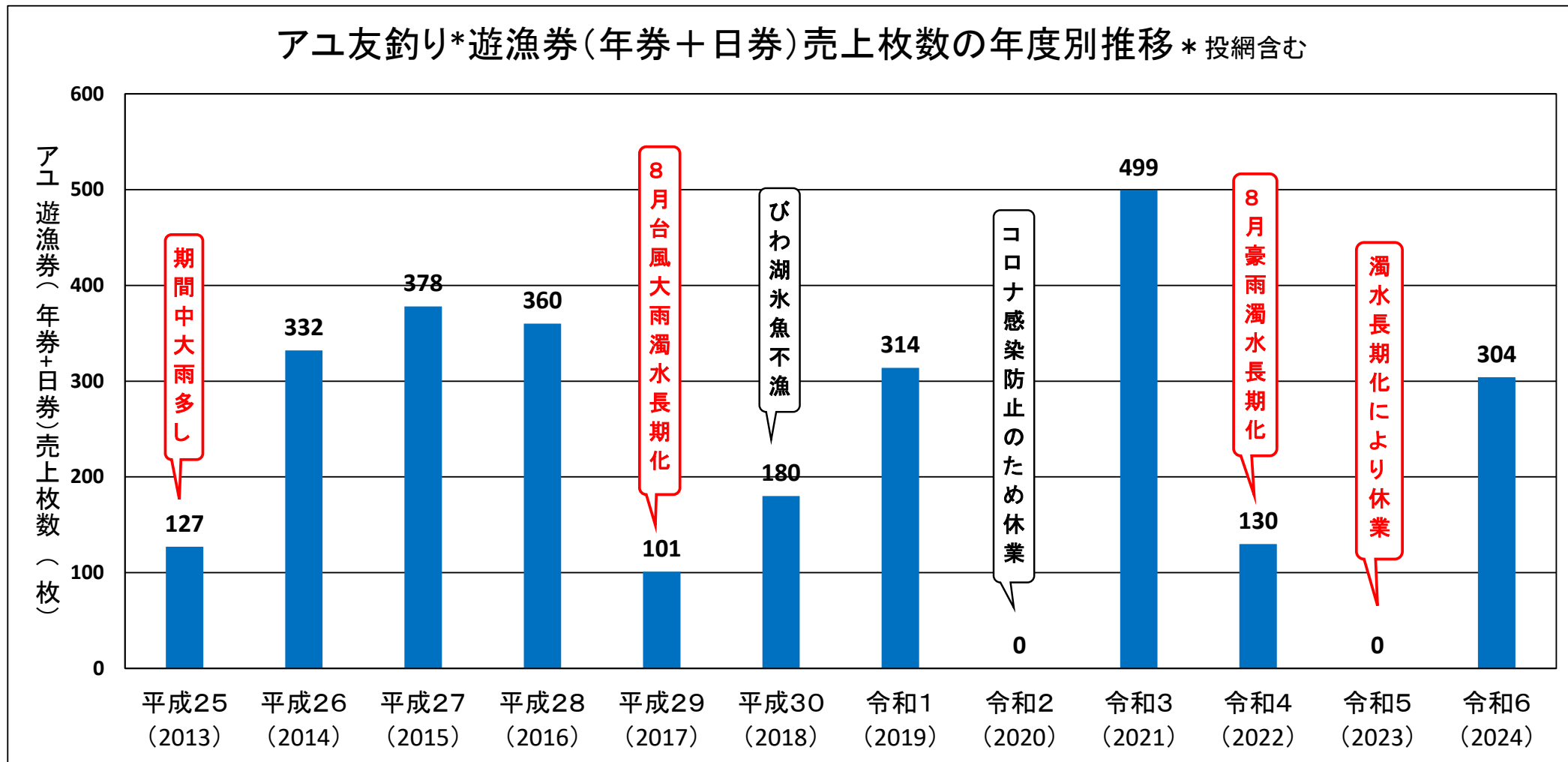




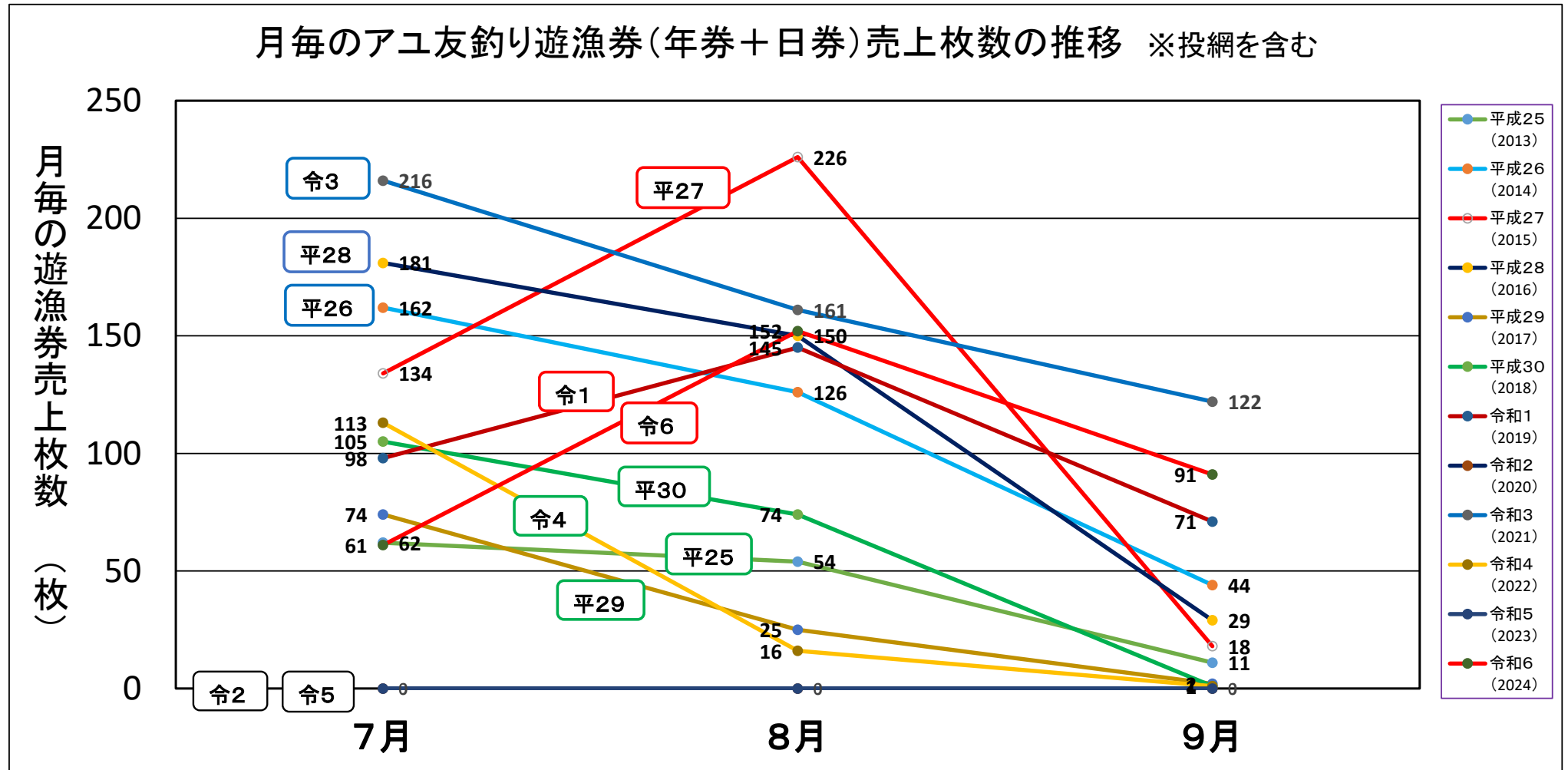
(注) 本漁協でのアユ漁は友釣りがほとんどを占めています。投網の遊漁は極めて少数です。

考察

(1)2020年のコロナ休業を除けば、アユ漁は上表のとおり大雨・豪雨による影響をもろに受けてきたことが分かります。2017年の大雨以降釣り客の変動が激しいことが見て取れます。自然相手であるとは言え、近年の異常気象や局地的な災害に翻弄されることになっています。

(2)上表の期間においては、2017年に濁水の長期化が始まり、年を経る毎に次第に濁りも回復してきていたところに、2022年に再度2017年の規模を超える濁水長期化がもたらされました。コロナ休業開けの2021年の好調は1年限りで後が続きませんでした。

(3)度重なる濁水の長期化によって、砂・泥の堆積した河川になり、アユの生育環境として適さない川となっています。果たして、自然の回復機能によってアユの棲める川となってくれるのかは見通せません。



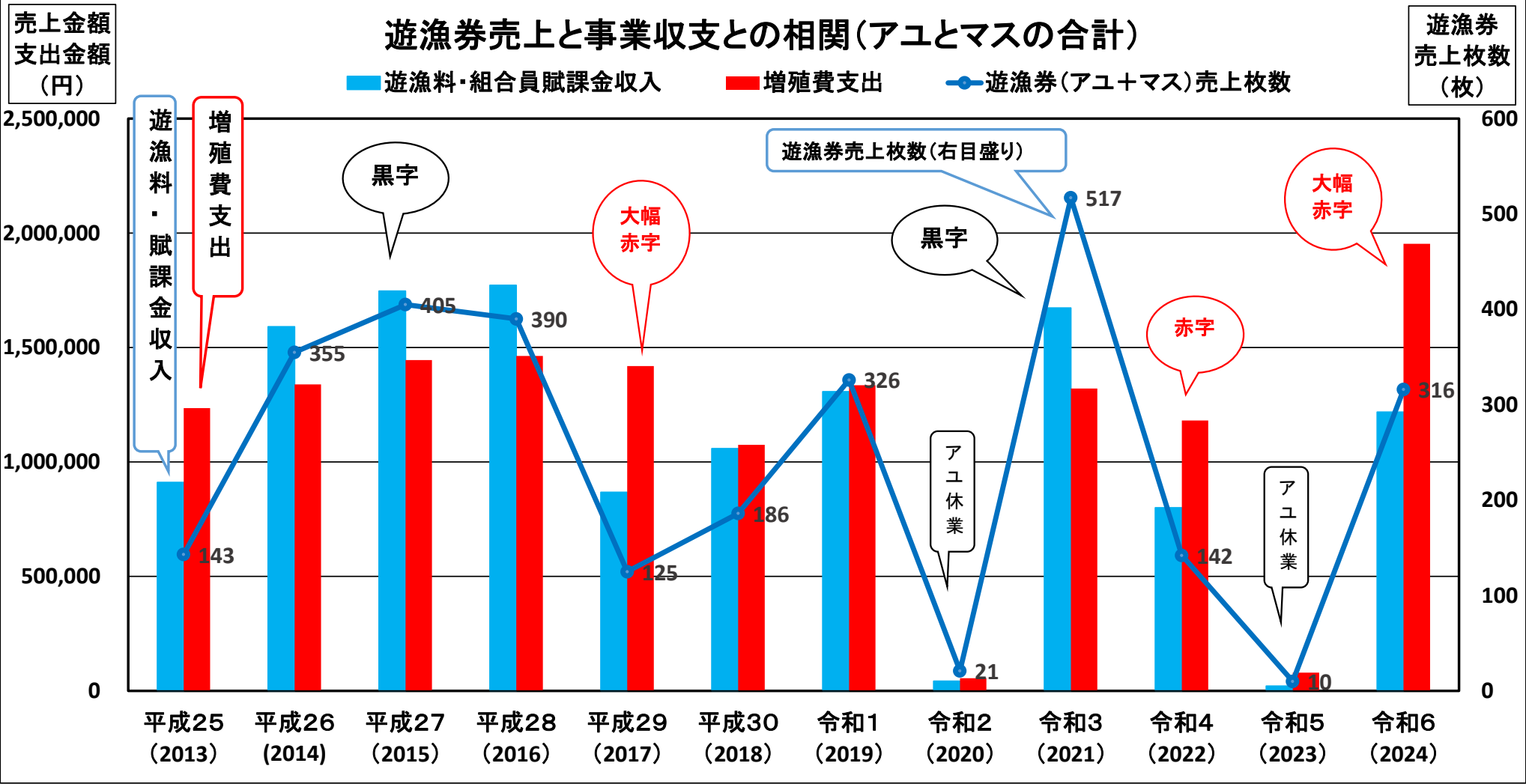
(注1) 本漁協のアユの解禁日は毎年7月上旬です。終了は9/30(県内統一)です。アユ稚魚放流(全量琵琶湖産)は5月末頃に行っています。

(注2) 湖産アユは、9月に入りますと産卵期に入り体色が黒ずんできます。そのため、例年釣り客は激減します。ただ、近年9月に入っても猛暑続きで水温が高く、9月末まで釣りを楽しむことができます。

(考察) タイプ1 7月の出だしが好調、引き続き8月も好調をキープしていく場合で最も売上が期待できます。

タイプ2 7月の出だしはそれほどでもないが、8月に好調のピークを迎える場合で遊漁者にとっては期待大です。ただ、9月の急落が激しいです。

タイプ3 7月の出だしが不調で、そのまま8月に入ってもじり貧で推移する場合で、回復は期待できません。また同様に、8月に入って大雨、豪雨に見まれてしまうと回復不能となります。



- (注1) 本漁協はアユ漁を主体としています。マス漁の遊漁者数、遊漁料収入およびマス稚魚購入費はいずれもアユに比べてはるかに小さいものとなっています。
- (注2) 漁協における事業収入は遊漁料収入と組合員の賦課金収入です。事業支出は放流におけるアユおよびマスの稚魚購入費(増殖費)とオトリ購入費です。
- (注3) 漁協運営においては、上表の事業収支とは別に、支出として一般管理費(報酬、労務費、水道光熱費、法人税、河川漁連賦課金等)、収入として補助金等収入(県、市からの放流補助金、漁業補償金等)があります。本漁協では常態的に、一般管理費>補助金等収入の関係にあり、上表の黒字部分は相殺され、赤字は一層膨らみます。
- (注4) 本漁協の組合員数は、平成12年度が96名、令和6年度現在は60名。新規加入者は極めて少なく、一方で高齢化が進行。漁協の抱えるもう一つの課題です。
- (1) 上表において、明らかなように漁協の運営(事業収入)は遊漁券の売上げが左右します。
- (2) 平成26、平成27、平成28、令和3年は僅かに黒字。平成29は大雨・濁水発生、令和4は豪雨・濁水で赤字に転落です。なお、令和6は遊漁客増を見込んでいつもより多く放流しました。また、湖産アユ稚魚価格の高騰も影響しています。しかし、期待するほどには遊漁客が伸びませんでした。
- (3) 遊漁券の売上げを左右するのは、川の状態が良く、天候が安定して、よく釣れるということに尽きます。川の回復を願うばかりです。

考察

豪雨後の漁場等の変化

「こんな川で釣れるの？」(川の様相が変化)

- (1) アユの生息に必要な石が少なくなった。石が埋まってしまった。
- (2) 砂や泥が堆積して河床が平坦化した。
- (3) 上の(1)(2)等により、アユの餌となる付着藻類が少ない。



「好漁場」の消失

- ・アユの釣れるポイントが限られるようになった。
- ・以前はよく釣れていた場所が釣れなくなってしまった。
- ・放流後のアユの定着は不明(歩留まり不明)。
- ・解禁時になっても、石につくアユが見えない。
- ・アユの型が小ぶり、遡上アユも大きにならない。



「釣り客」の減少

釣り客が敬遠、遊漁者数が伸びない。



漁場環境の回復には？

- (1) 公共工事等による河川整備、濁水防止対策等
- (2) 自然の回復力を待つ。
- (3) 漁協として活動(モニタリング、軽微な漁場整備、PR等)

令和6年度の遊漁状況等

7/7解禁、9/30終了

- ・営業日数86日、入川可能日数75日(87%)
- ・7~9月末まで猛暑、川は渇水状態が続きました。
- ・実質的な漁場距離は、約2.2km(支流の杉野川を除く)

アユ遊漁者数304名(目標400名に対して76%)

- ・遊漁者は岐阜、愛知、京都、大阪等の近隣からの客が多い。
- ・特に年配層が多い。「安心して入れる川」として好評。
- ・3~5回のリピート客が多い。毎日の入川者は10人前後。

釣果は、平均で1人20尾~40尾。個人差大きい。

- ・サイズは、8月前半まで平均15~18cm。8月後半からは平均13~16cmと小さい。12cm前後も混じる。
- ・「小さくても数が釣れる川」として親しまれています。

琵琶湖から遡上も数回あり。例年より量的には少ない。

- ・遡上アユはなかなか大きくはなってくれません。

濁水発生から2年半が経ち、ようやく濁りも取れるようになってきました。しかし、河川環境はまだまだよくありません。そのような中ではありますが、アユは元気に育ち、何とか釣りができる状況にはなってきています。なかなか、元の漁場を取り戻すことはできません。自然の回復力に期待するより他ありません。